

地域情報（県別）**【千葉】iPadを診療に活用し10年「患者の不満解消と医療リテラシー向上を図りたい」-宮川一郎・習志野台整形外科内科院長に聞く◆Vol.1**

2019年11月25日（月）配信 m3.com地域版

医師の説明不足に患者は不満を感じているのではないか——。「習志野台整形外科内科」（千葉県船橋市）の院長の宮川一郎氏は、勤務医時代からの問題意識の解消を図り、患者の医療リテラシーを引き上げたいと日本でのiPad発売日からこの機器を診療に活用している。自身が経営する企業が製作した3D動画を端末に入れて患者に説明。宮川氏は「患者と一体感が生まれ、患者参加型の診療が実現できる」とその手ごたえを話す。（2019年8月2日インタビュー、計3回連載の1回目）

[▼第2回はこちら](#)[▼第3回はこちら](#)

——習志野台整形外科内科ではタブレット端末「iPad」を活用していると聞きました。まずは現在の用途についてお聞かせください。

当院では現在、14台のiPadを置いていて、ウェブ問診票や診療、リハビリ時の患者説明に活用しています。また、待ち時間を有意義なものにさせていただこうと患者さんに貸し出して、インターネットやアプリを利用できるようにもしています。

当院がiPadを導入したのは日本でこの端末が発売された2010年5月です。当初はiPadに医療に関する動画を200本ほど入れていましたが、間もなくスマートフォンが普及して患者さん自身がインターネットや好きなアプリを手軽に楽しめるようになったので、待ち時間における利用については現在、お子さんがゲームや絵本のアプリなどを楽しむ程度になっていますね。



院長の宮川一郎氏（クリニック提供）

——そもそも、iPadを使うことでどんなメリットを得られると考えたのでしょうか。

主に2つあります。患者さんの不満を軽減させて、患者さんの医療リテラシーを引き上げることです。iPadの特性がこれらの目的を実現するために大きく貢献してくれるだろうと考えました。

私は勤務医時代からこの2つのことに関して問題意識を持っていました。私は以前から患者さんにわかりやすい説明を心がけていて、たとえば必要に応じて紙にイラストや文章を書いて患者さんに手渡しています。私が整形外科部長を務めていた「岩井整形外科内科病院」（東京都江戸川区）は脊椎の専門病院であり、患者さんの多くは複数の病院を経由した後に岩井整形外科内科病院を受診していました。しかしながら私の説明への反応や私が書いたメモを大事そうに持って帰ったりする患者さんの姿を見ると、他院で十分に説明を受けていない方が少なくないのではと推察されたのです。

医師側の説明が果たして十分なのかという疑問が浮かぶと同時に、患者さんの医療リテラシーの低さも気になりました。20年ほど前の当時はお薬手帳や血圧手帳を持参しない人が多く、また服用している薬について尋ねても「白くて丸いもの」くらいしか答えられない人がたくさんいました。

後に、医師の説明不足が患者さんの不満であることは客観的にも示されました。開業医向け情報誌などを発行する「日本医療企画」などが2009年に行った「患者1万人大調査」によると、患者に聞いた医療への不満の中で、「医師のコミュニケーション」が突出して多かったのです。

——先生の年代の医師で、当時、医療の問題の解消とiPadをすぐに結びつける人は非常に少なかったのではないのでしょうか。なぜ先生は「iPadを使えば」というアイデアが浮かんだのでしょうか。

元をたどれば、子どものころからコンピューターが好きだったことが大きく影響しているでしょう。私は中学生のころにはプログラムを書いて、高校生のころは当時人気だったロールプレイングのようなゲームを自分でも作りたいと思っていました。医師の道を考えだしてからは、レセプトコンピューターのシステムを開発したい思いも抱くようになりました。「コンピューター好きが医師になった」わけです。

着想の具体的なきっかけは、岩井整形外科内科病院に勤めていた時です。私は院内における看護業務の効率化を図ろうと、紙に記載していた患者のバイタルサインをPDA（携帯情報端末）に入力する取り組みを試験的に行いました。ところが、コンピューターメーカーに要望を伝えて作ってもらったPDAが使いやすいものではなかったのです。付属のペンを使わないと操作できず、バッテリーが数時間で切れてしまう。画面が小さく、バックライトがないので夜には見えづらい、といった課題があり、取り組みは頓挫してしまいました。

そして数年後に報道されたのがiPadの発売。「あのころに感じた課題がこの端末だったら解決できる」。そう考えました。

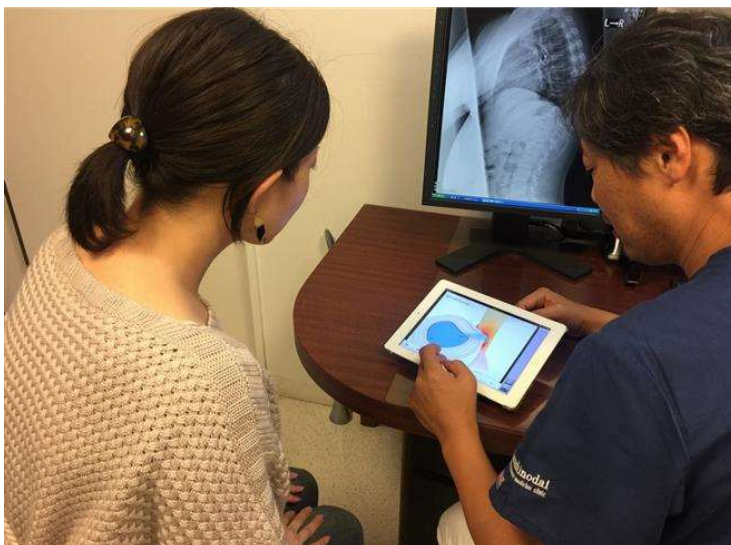
——なるほど、そんな経緯が。現在、患者説明には具体的にどう活用しているのですか？

病気や診断、治療に関する3D動画やアニメーションをiPadに表示させながら説明するようにしています。iPadに入っているデータの中には紙の資料をデータ化したものもありますが、動画の多くは私が代表取締役を務める「メディカクラウド」が製作したものです。メディカクラウドは医療に関わるコンテンツやシステムなどの開発・製作・販売を行っている企業で、私の他に3人の社員が在籍しています。

患者さんからすれば2次元に留まるレントゲン画像を見せられてもピンとは来づらいわけですが、3次元の立体的な動画をお見せすることで理解度はぐっと深まるようです。たとえば通常、椎間板ヘルニアについて説明する際にはこんなことを言います。

「椎間板というのは腰の骨と骨の間にあるクッションで、このクッションが飛び出てしまうことをヘルニアと言います。ヘルニアには痛みが伴いますが、単純に椎間板が飛び出ているから痛いのではなく、出ている部分がペチペチと神経に当たり続けて神経が腫れるから痛みが出るわけです。ということは、鎮痛剤の注射や服用によって腫れを取るか、手術によって引っ張りを取ってそもそも腫れないようにすれば病気が治るわけです」

とまあこんなことを話すわけですが、患者さんからすればこれらを口頭だけで説明されてもわかりづらいですよね。紙のイラストを見せてもらえば少しイメージは沸きますが十分ではありません。3D動画だと立体的なのでより伝わりやすいですし、患者さんの理解度に合わせて気になるところを一時停止したり、戻ってみたり、拡大したりすることが簡単に早くできるのです。



iPadを使って患者に説明する宮川院長（クリニック提供）

——iPadだと患者との物理的・心理的な距離感が縮まりそうですね。

そうだと思います。パソコンのモニターを一緒に見る形だと相手が画像をしっかりと見ているかがわかりづらいのですが、iPadを間に挟んでお互いにそれを覗き込む形にすれば物理的な距離感が縮まりますし、患者さんの希望によって一時停止したり、わかりづらかった部分を互いにもう一度見たりすることで空間を共有している感覚が生まれます。診療に一体感が生まれて、患者さんに医療に参加している感覚を持ってもらいやすいのです。

◆宮川 一郎（みやがわ・いちろう）氏

1993年帝京大学医学部卒。総合病院国保旭中央病院、帝京大学整形外科・救命救急センター、岩井整形外科内科病院整形外科部長を経て、2007年に「習志野台整形外科内科」（千葉県船橋市）を開院。2011年、医療関連コンテンツ・システムの開発や製作を行う「メディカクラウド」を設立。iPadなどのデジタルツールを診療所運営に積極的に取り入れている。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

